

日本語における否定と焦点の関係について

今 仁 生 美

Abstract

In this paper we will examine Kuno's theory on negation in Japanese. He hypothesizes that the scope of negation does not extend over a verb or adjective that immediately precedes it in a sentence. This a little surprising hypothesis (since propositional negation is also used in Japanese) has been influencing semantic or syntactic research on negation, and also challenged by many researchers. His analysis of negation in Japanese is mainly based on the concepts of foci and the scope of negation. But exactly how these two concepts are involved in negation (or not) is still in debate. There is another issue in his analysis that has often been argued in literature. He proposes that negative sentences in Japanese be classified into two types of information structures. However, as he himself admits, he uses these concepts without rigid definition. There are two purposes in this paper. One is to show that the two information structures he made a distinction of can be resolved into a relationship between foci and alternative sets of them. The other is to examine if his hypothesis is valid in terms of the scope of negation.

1. はじめに

日本語の否定に関する研究において繰り返し取り上げられる問題の一つに、久野（1983）が扱った問題がある。久野は、「私はこの写真をパリで撮らなかった」とような否定文の容認可能性が低い理由として、「否定のスコープ（作用域）」と「焦点」の関係が関与するとし、基本的には否定のスコープを非常に狭いものと見なす仮説を提示した。その後の否定のスコープに関する研究においては、まず構造的なアプローチによる分析が行われ（Kato（1985）、Takubo（1986）、Yatabe（1996）、加藤（2003）、益岡（2004）など）、その後、語用論的な分析も行われるようになる（小林（1993）、鄭（1995）など）。久野の分析が議論を巻き起こす理由は、久野は否定のスコープを狭いものと見なす一方で、その例外を認める点にある。この例外となる文は「例外」と言うにはあまりに普通の（通常使われる）文であり、実際のところ、この「例外」を久野は「マルチプル・チョイス式インフォーメーション構造」をもつ文と名付けて、否定のスコープが狭いときの文と対比させるのである（後者を久野は「穴埋め式インフォーメーション構造」をもつ文と名づける）。しかし、そもそも二つの構造を区別し、一方ではスコープが狭く、他方ではスコープが広いとするのであれば、否定のスコープの広さに関する仮説はその意義を失う（同じ指摘が鄭

(1995)にある)。さらに、久野は、マルチプル・チョイス式インフォメーション構造をもつ文と穴埋め式インフォメーション構造をもつ文の性質は不明としたままで分析を展開しているため、全体の議論に不透明さが入り込んでいることは否めない。

本論の目的は、二つある。一つは、久野が扱った例文の特徴は、焦点と代替集合との関係により説明できることを示すことである。本論の観察が正しい場合、マルチプル・チョイス式インフォメーション構造をもつ文と穴埋め式インフォメーション構造をもつ文とをあえて区別する必要はないことになる。もう一つの目的は、久野が主張する「日本語の否定のスコープは狭い」とする仮説を検証することである。この仮説は反論されることが多いが、本論では、(a) 否定の意味計算の観点からすればこの仮説には当を得た部分があること、(b) ただし、久野の分析には現象をうまく説明できていない部分もあることを示す。

2. 久野 (1983) の仮説

まず、本論の出発点となる久野の分析を概観する。冒頭で言及したように、久野は、否定のスコープをかなり狭いものと捉える。久野が取り上げた例文は (1) および (2) である。なお、(1) および (2) の容認可能性の判断は久野によるものである。

(1) A : 君ハ、コノ写真ヲパリデ撮ッタノカ。

B : *イヤ、パリデ (ハ) 撮ラナカッタ。(p126)

(2) A : 君ハ、終戦ノ年ニ生マレタノカ。

B : ??イヤ、終戦ノ年ニハ、生マレナカッタ。(p126)

久野によれば、(1B) は (1A) の答えとしては不自然である。また、(2B) も (2A) の答えとしてはかなり不自然である。久野は、その理由を次の仮説を立てることによって説明しようとする。なお、以下では便宜的にこの仮説を「スコープ仮説」と呼ぶことにする。

(3) スコープ仮説

否定辞「ナイ」の否定のスコープは、それが附加されている動詞、形容詞、「名詞 / 形容詞 + ダ」に限られる。

この仮説によれば、否定のスコープは極めて狭い。たとえば、(1) の例では、否定のスコープは動詞の「撮る」のみである。久野は、このスコープ仮説を用いて (1B) の不自然さを次のように説明する。(1)の会話は、「この写真を撮った」のはパリかどうかを話題としている。つまり、「パリ」が焦点となっている。さて、話し手Bは、「この写真」を撮ったのはパリではないということを知りたいのであるから、(1B) においては、否定の作用が「パリで」まで及んでいる必要がある。ところが、スコープ仮説に従えば、否定のスコープは「撮る」までであり「パリで」までは及んでいない。そのため(1B)は不自然なのであるというのが久野の主張の流れである。おな、以下では、議論を分かりやすくするために (4) や (5) のような表記を併用することにする。焦点は[・]_{Focus} で表し、否定のスコープは[・]_{Neg} で表示する。

(4) B : いや、[[パリで (は)]_{Focus} 撮ら]_{Neg} なかった。

(5) B : いや, [パリで (は)]_{Focus}[撮ら]_{Neg}なかった。

(4) が示しているのは否定の作用が焦点である「パリ」にまで及んでいるということであり, (5) が示しているのは否定の作用が動詞「撮る」のみに及んでいるということである。久野は, (1B) の答え方が不自然であるのは, (5) の構造をもつためであるとした。

久野が取り上げているもう一つの例を見てみよう。先の (1B) が不自然であるのに対し, (6B) は自然である。

(6) A : 君ハ, 終戦ノ年ニ生マレタノカ。

B : イヤ, 終戦ノ年ニ生マレタノデハナイ。

スコープ仮説によれば, 「名詞+ダ」の場合は否定の作用が名詞にまで及ぶ。したがって, (6) では, 焦点である「終戦ノ年」が否定のスコープの中に入っていることになり, (6B) が自然であることをうまく説明できる。久野は, このことを次のように述べている。

(6) は) 文全体に「ノ」を附加して名詞化し, それにコピュラ「ダ」を附加して, そのコピュラに否定辞を加えた形式である。日本語のコピュラは独立性が全くなく, 先行する要素と結合して, 初めて独立形式を形成する。従って, 「Xデハナイ」の「ナイ」は, 「X」をそのスコープ下に入れる。(p128)

久野の「スコープ仮説」は, (1B) の不自然さや (6) の自然さを説明できる。しかしながら, このように否定のスコープが狭く, 「動詞, 形容詞, 「名詞/形容詞+ダ」に限られる」場合, 説明できない現象も出てくる。それが久野が呼ぶ「マルチプル・チョイス式」構造をもった文である。たとえば, 次の (7) は自然な文であるが, 「スコープ仮説」に従えば焦点「車で」が否定のスコープに入っていないので, (7) は不自然であるはずである。

(7) 今日ハ[車で]_{Focus}[来]_{Neg}なかったので, 歩いて帰らなければならない。

そこで, この点を解決するために久野は, 次のような仮説を「スコープ仮説」の例外として規定する。これを以下では「マルチプル・チョイス条件」と呼ぶことにする。

(8) マルチプル・チョイス条件:

否定のスコープが, 上の制限を超えるのは, 否定の焦点が「マルチプル・チョイス式」インフォーメーション構造を持っている場合のみである。(p130)

(8) の「マルチプル・チョイス式」インフォーメーション構造とは, 久野によれば, 「僕は, {歩いて, 自転車, バス, 車で}来た」のように焦点の値としていくつかの選択肢があるものを指す。

久野は, この「マルチプル・チョイス式」インフォーメーション構造に対して, 先の (1B) のような文の構造を「穴埋め式」インフォーメーション構造と呼び, これら二つの構造を区別する。久野によれば, 「穴埋め式」インフォーメーション構造とは, 一回限りの出来事に対して適用されるもので, 「僕はこの写真を () 撮った」の空欄に適切な語彙が一つ入る構造になっているものを指す。このことを久野は次のように述べている。

どういうインフォーメーションが「穴埋め式」構造を持ち, どういうインフォーメーションが「マルチプル・チョイス式」構造を持っているかは明らかではないが, 一般的に言って, 一回限りの出来事に関するインフォーメーションは, 「穴埋め式」であり, 反復して行われ

る出来事に関するインフォメーションは、「マルチプル・チョイス式」である、と言える。
(p130)

ここで、久野の「穴埋め式」構造と「マルチプル・チョイス式」構造の区別をもう少し詳しく概説しておこう。久野は、次の(9)の例文を用いてこの二つの構造の違いを説明する。

- (9) a. 僕ハ、終戦ノ年ニ生マレタ。(p129)
b. 僕ハ、車デ来タ。

久野によれば、(9b)はマルチプル・チョイス式インフォメーション構造をもつ文であり、(9a)は穴埋め式のインフォメーション構造をもつ文である。まず、(9b)は、(10)のような構造をもつとされる。つまり、マルチプル・チョイス式インフォメーション構造をもつ文には、(10)に示されるように、いくつかのチョイスがあり、そのうちの一つ(ここでは「車デ」)を選ぶようになっている。

- (10) 僕ハ、 $\left\{ \begin{array}{l} \square \text{歩イテ} \\ \square \text{自転車デ} \\ \square \text{バスデ} \\ \blacksquare \text{車デ} \end{array} \right\}$ 来タ。

他方、久野は、(9a)が(11)のような「マルチプル・チョイス式インフォメーション構造を持っていると考えることは、困難である(p129)」とする。

- (11) 僕ハ、 $\left\{ \begin{array}{l} \square \text{1920年} \\ \square \text{1930年} \\ \blacksquare \text{終戦ノ年} \\ \square \text{1940年} \\ \square \text{1950年} \end{array} \right\}$ ニ生マレタ。

久野によれば、(11)のような構造が許されるのは、たとえばシェイクスピアは何年に生まれたかを{1505年, 1564年, 1725年, 1813年}の集合から一つ選ぶといった人工的なコンテキストの場合である。結論として、久野は、(9a)は、(12)のように括弧の中に特定の年が挿入される穴埋め式の構造をもつ文と見なす。

- (12) 僕ハ、(終戦ノ年)ニ生マレタ。

以上、久野(1983)の主張の骨子を見てきたが、久野の議論の運びは決して分かりやすいものとは言えない。その理由の一つは、焦点の代替集合の扱い方にある。代替集合というのは、焦点の位置に現れ得る要素の集合を指す。語彙Aに焦点が置かれる場合、通常、Aの代替集合Sを考慮することができる。たとえば、(13)で「太郎」に焦点が置かれている場合、

- (13) [太郎]_{Focus}が、パーティに来た。

ここでの代替集合Sはパーティに来る可能性があった人の集合、すなわち、{小百合, 紀子, 健一, ……}である。先の(10)と(11)の選択肢はいずれも焦点の代替集合の要素であり(すなわち(10)の場合は「歩いて」、「自転車で」等、また(11)の場合は「1920年」「1930年」等)、その限りにおいては(10)と(11)に違いはない。しかし、久野は、(11)に関しては、(10)に示

されるような代替集合を考えない。つまり、「僕ハ終戦ノ年ニ生マレタ」の「終戦ノ年」は焦点ではあるが、代替集合の存在は（歴史クイズなどの場合を除いて）想定しない。焦点のこの扱いが久野の議論を多少分りにくいものになっている理由の一つである。

ところで、久野は、次の (14) と (15) を対比させ、(14) のような文が自然である理由を、(14) がマルチプル・チョイス式の文であるからであるとする。

(14) 僕ハ、時計ヲパリデ (ハ) 買ワナカッタ。(p131)

(15) *僕ハ、コノ時計ヲパリデ (ハ) 買ワナカッタ

(14) に対しては久野は次のように述べている。

(本文の (14) の場合は,) 「パリデ (ハ)」を否定の焦点とする。この解釈では、「時計ヲ買ッタ」ことが前提となっている。この文の否定辞は、直前の動詞「買う」を超えて、「パリデ (ハ)」をそのスコープ下に入れようとしている訳である。この文が適格文であるのは、(38a) (=本論の (15):著者注) の「コノ時計」の販売場所は、1ヶ所でしかあり得ないのに対して、「時計」の販売場所は、一ヶ所とは限らない、即ち、「時計ヲ買う」という動作が、必ずしも一回限りの動作とは限らないことに起因しているものと考えられる。(p131)

以上、久野の主張の中心となる考え方を見てきた。彼の主張のポイントとなる点は二つある。一つは、「パリでこの写真を撮らなかつた」のような否定文の不自然さは「焦点」および否定の「スコープ」という概念を用いて説明されるということである。もう一つは、「一回限りの出来事」を表す穴埋め式インフォメーション構造と「反復して行われる出来事」を表すマルチプル・チョイス式インフォメーション構造を区別し、それぞれに対して否定のスコープの範囲を定めるということである。この二つのポイントを検証する上で重要であると考えられるのは、(15) が文脈次第で自然である点である。たとえば、(15) の話し手は「この時計」がパリで展示販売されていたのを見たがそのときは買わず、その後同じ時計がロンドンで展示販売されていたときそれを購入したとしよう。この場合、(15) は自然である。他方、「この時計」が一か所でのみ販売される場合は、久野が指摘するように (15) は不自然である。このことは、直感的にはそれぞれマルチプル・チョイス式の構造と穴埋め式の構造に対応するが、興味深いのは、(15) が自然である状況では、「この時計」はどのチョイス (となる事態) においても何らかの形でその状況下に存在する (あるいは関わっている) 必要があるということである。つまり、(15) の場合は「この時計」はパリでもロンドンでも販売されていたのでなければならない。では、なぜこのような制約が課せられるのか。以下では、この疑問を解くことも含めて、マルチプル・チョイス式の構造と穴埋め式の構造を想定することの是非を考察する。

3. 穴埋め式とマルチプル・チョイス式の区別

久野は、文を穴埋め式とマルチプル・チョイス式の形式について、

どういうインフォメーションが「穴埋め式」構造を持ち、どういうインフォメーションが「マルチプル・チョイス式」構造を持っているかは明らかではない (p130)

と断り書きをしているが、実際にこれら二つの形式を設ける必要があるのかどうかを検証するためには、まさにこの断り書きの部分を明らかにしなければならない。結論から先に述べると、穴埋め式とマルチプル・チョイス式の違いは構造的なものではなく、むしろ焦点の代替集合の取り方に起因するものである(同じように代替集合を用いたアプローチとして Yatabe(1996)がある)。この点をまず以下に簡単に説明する。

通常、焦点となる語句は代替集合をもつ。たとえば、(16)であれば、来なかった人たちの集合が焦点「太郎」の代替集合Alt(たとえば、 $\text{Alt} = \{\text{太郎}, \text{上田}, \text{花子}, \dots\}$)である。

(16) A : 誰が、来なかったのか。

B : [太郎]_{Focus}が、来なかった。

(16)の代替集合Altは(「太郎」を焦点とする)個体の集合である。ここでAltの要素を含む命題の集合AltPを考える。たとえば、「パリで」を焦点としてもつ次の(17)において、

(17) A : 君は、この時計をパリで買ったのか。

B : いや、僕はこの時計をパリで(は)買わなかった。

「僕はこの時計をパリで買った」の代替集合AltPは、肯定命題と否定命題が両方含んで以下のようになる。

(18) P=[僕はこの時計をパリで買った]

Q=[僕はこの時計をロンドンで買った]

R=[僕はこの時計を東京で買った]

$\text{AltP} = \{P, \neg P, Q, \neg Q, R, \neg R\}$

(17)のBの返答は、このAltPの要素のうちの一つ($\neg P$)である。さて、(18)のAltPの各命題P, Q, R, ……は、焦点が「パリで」であるので、「パリで」以外の語句すなわち「僕」「この時計」および「買った」は固定されている。実は、この固定化が、先の(15)、すなわち、「僕ハ、コノ時計ヲパリデ(ハ)買ワナカッタ」が自然な読みをもつとき、「この時計」がパリでもロンドンでも(何らかの形で)販売されていた必要がある理由である。これに対し、「この時計」が一か所のみで売られている状況では、「この時計」が代替集合AltPにおいてPと $\neg P$ 以外の命題に現れる可能性はなくなる。なぜなら、代替集合の要素は文字通り何でもよいわけではなく、代替集合の要素は代替と見なされる可能性がなければならぬからである。「この時計」がすでに文脈上、一か所でのみ売られていることが分かっている場合(あるいは一か所で売られていることがデフォルトの場合)、「この時計」はPと $\neg P$ 以外の代替集合の中に現れることができず、結果的に、焦点をもつ(15)の文に対して有効なAltPは形成されない。

(18)のように代替集合を作ることができる場合は、言うまでもなく、マルチプル・チョイス式に相当する。文脈からチョイスすなわち代替が生成可能であり、否定文の容認可能性も高い。他方、代替集合を作ることができない場合は、穴埋め式に相当する。文脈上チョイスを生成することが難しく、したがって、代替集合を作ることができない。この場合は、否定文の容認可能性は低い。以上が、以下で展開する議論の簡単な概観である。以下ではここで概観した内容をより詳しく見ていく。

4. 焦点と否定のスコープ

否定のスコープの議論に入る前に、「否定の焦点」という用語について確認をしておきたい。久野の論文において、また、一般に、言語学の中で扱われるいわゆる「焦点」と「否定の焦点」とは異なる。例を挙げよう。(19)は、通常の焦点の例である。

(19) A : 誰が、来なかったのか。

B : [太郎]_{Focus}が、来なかった。

(19B)はwh疑問文である(19A)に対する返答であるので、「太郎」に焦点が置かれている。(19B)は否定文であるが、否定の作用はこの「太郎」には及んでない。(19B)は「来た人」としての太郎を否定しているわけではなく、単に「来なかった人」として太郎を認定しているだけであるからである。別の見方をすれば、(19B)に対応するのは、(20)であって(21)ではない。

(20) 来なかったのは、太郎だ。(=(19B))

(21) 来たのは、太郎ではない。(≠(19B))

代替集合という考え方を用いるならば、(19B)の意味内容は、「来なかった」人たちの代替集合Alt(たとえば、Alt={太郎, 上田, 花子, ……})の一要素が「太郎」であるということである。これに対し、久野が扱ったのは、焦点が否定のスコープの中に入っている文である。冒頭に挙げた久野の例文(1)をもう一度見てみよう。

(1) A : 君ハ、コノ写真ヲパリデ撮ッタノカ。

B : *イヤ、パリデ(ハ)撮ラナカッタ。(p126)

この質疑応答の場合、(1B)の「パリデ」はもはや新しい情報ではない。つまり、いわゆる焦点の働きはもたない。ただ、この対話においては、(1B)が意図している意味内容は、(22)であって(23)ではないことから、否定の作用は「パリデ」に及んでいなければならないことが分かる。

(22) この写真を撮らなかったのは、パリだ。(≠(1B))

(23) この写真を撮ったのは、パリではない。(=(1B))

久野が「否定の焦点」と呼んでいるのは、この「否定の作用が及んでいる(あるいは及んでいなければならない)」場合の語句(ここでは「パリデ」)である。なお、スコープ仮説によれば、否定のスコープは「撮る」であるので、否定は「パリデ」にまで及ばない。久野によれば、(1B)が不自然なのはそのためである。

さて、本題に戻ろう。前節で見てきたように、久野は、日本語の否定文に対して穴埋め式インフォメーション構造とマルチプル・チョイス式インフォメーション構造を区別し、それぞれに対して否定のスコープの範囲を定める。穴埋め式の場合は否定のスコープは極めて狭く、マルチプル・チョイス式の場合は否定の焦点となる語彙まで否定のスコープは伸びる。また、穴埋め式インフォメーション構造とマルチプル・チョイス式インフォメーション構造の違いは、久野によれば、「一般的に言って、一回限りの出来事に関するインフォメーションは、「穴埋め式」であり、反復して行われる出来事に関するインフォメーションは、「マルチプル・チョイス式」である」。

確かに、久野が提示した二つの例文「私は1950年に生まれなかった」と「私は今日は車で来なかった」とを比べると、そこには久野が指摘する違いがある。すなわち、「私は1950年に生まれなかった」の場合、生まれる年を選択することは本人にも他人にもできない出来事であるので、そういう意味では生まれ年は他の選択肢をもたない。他方、「私は今日は車で来なかった」の場合は、話し手が通勤という繰り返される行為の中で車以外の手段を持っていることは容易に想定できることであるので、チョイスは複数あることになる。つまり、穴埋め式の文とマルチプル・チョイス式の文には違いがあるように見える。しかし、実際には、(24)のようにこの区別がはっきりとしない例もある。

(24) A：昨日の取引が失敗したらしいな。誰が悪いんだ。太郎が悪いのか。

B：いや、太郎は悪くない。

(24)は、久野が取り上げた(1)と同じく、焦点が否定のスコープの中に入る解釈が意図されている文である。(1)のAに対する返答は、すでに見たように、(28)ではなく(29)であった。

(1) A：君ハ、コノ写真ヲパリデ撮ッタノカ。

B：*イヤ、パリデ(ハ)撮ラナカッタ。(p126)

(25) この写真を撮らなかったのは、パリだ。(≠(1B))

(26) この写真を撮ったのは、パリではない。(=(1B))

このパターンは(27A)への返答においても同じで、(27A)に対する返答は(29)であって(28)ではない。

(27A)昨日の取引が失敗したらしいな。誰が悪いんだ。太郎が悪いのか。

(28) 悪くないのは太郎だ。(≠(24B))

(29) 悪いのは太郎ではない。(=(24B))

(27A)で言及されている出来事つまり「昨日の取引」は一回限りのものである。したがって、(27B)は穴埋め式の文ということになる。この場合、否定のスコープは焦点の「太郎」にまで及ばないはずであるので、(24B)は不自然であることが予測されるのであるが、実際は自然である。そこで、(24B)が自然であることを説明するために、「悪いのは太郎以外の人でもありえた。つまり、(24B)はマルチプル・チョイス式の文である」としたとする。しかし、その場合は、出来事としては一回限りであるが、形式はマルチプル・チョイスであることになり、今度は穴埋め式とマルチプル・チョイス式の区別が不鮮明になる。(本論がここで問題にしているのは、久野が穴埋め式とマルチプル・チョイス式との間を区別するために用いた「一回限りの出来事」「複数の出来事」という特徴づけである。この特徴づけは上で見たようにあまりうまくいかない。後述するように、このような特徴づけではなく、現象を焦点と代替集合との関係として見れば(24)は代替集合が生成可能であり、それゆえに容認可能性が高いと説明することができる。)

この区別がうまく機能しない例は他にもある。久野は、「この時計」ではなく「時計」が用いられている文は、マルチプル・チョイス式の文であると述べているが、もしそうであるなら、(30B1)の返答の仕方は(31B1)と同様自然であるはずである。

(30) A：パリで時計を買いましたか。

B1: ??いえ, 時計を買いませんでした。

B2: いえ, 買いませんでした。

(31) A : 今日, 車で来ましたか。

B1: いえ, 車で来ませんでした。今日は歩いてきました。

B2: ??いえ, 来ませんでした。

しかし, 実際は(30B)はあまり自然な返答ではない。実際のところ, (30B)の否定のスコープは「時計を買う」ではなく単に「買う」である可能性が高い。なぜなら, (32A) への返答として, (32B2)は適切であるが, (32B1)は不適切ではないにしろ(32A)への直接の返答とは考えられないからである。

(32) A : パリで時計を買いましたか。

B1: ??いえ, 買ったのは時計ではありません。

B2: いえ, 買いませんでした。

この観察が正しいならば, (30B)において「時計」は否定のスコープの中には入っていない。

以上のことから, マルチプル・チョイス式の構造と穴埋め式の構造の区別によって否定文を分析するには無理があることが分かる。以下では, マルチプル・チョイス式の構造と穴埋め式の構造の区別は, 焦点と代替集合との関係から導くことができることを示す。

4.1. 代替集合と焦点

代替集合は, 一般に次のような特性をもつ。

(33) (a) 代替は焦点となる語句のみを変化させたものである。

(b) 何らかの状況において, 代替として「可能な」ものが代替集合の要素である。

以下では, まず, (33a) から見ていくことにしたい。

先の節で述べたように久野は次の(34)を不自然な文と見なすが, 実際は文脈次第で(34)は自然である。

(34) 私はこの時計をパリで(は)買わなかった。

たとえば, 「この時計」を販売する人物が, 場所を変えて同じその時計を販売したとしよう。(34)の話し手は, 「この時計」が販売されているのをパリで目にしたのだがそのときは購入せず, それがロンドンで販売されていたときに購入したのだとする。この場合, (34)は自然である。つまり, 「この時計」がパリでもロンドンでも販売されていたのであれば, (34)は問題なく用いられる。他方, 「この時計」がロンドンの有名時計店でのみ販売されていたのであれば, (34)は不自然である。この理由は次のように述べることができる。代替集合AltPは, 先に述べたように, 焦点語句以外の部分を固定する。これは, 量子化 $\forall x$ や $\exists x$ の意味解釈が x 以外の変項への割り当てを固定しておいて x の部分のみの付値を(変えて)調べるのと同じである。したがって, 代替集合AltPにおいては, 「この時計」は固定される。言いかえれば, 「この時計」はどの代替にも表れるのでなければならない。つまり, パリでもロンドンでも「この時計」は販売されている可能性があったのでなければならない。ところが, 時計は一つの店で販売されるのが通常である

ため、「この時計」があちこちで販売されるという状況は特別な文脈がない限り想定しにくい（久野も「特定の所持品の販売場所は、「穴埋め式」インフォメーション構造を持っていると考えられる（p. 131）」と述べている）。(34)が通常の文脈では不自然に感じるのはこのためである。これに対し、「この時計」がパリでもロンドンでも販売される場合は、代替集合を問題なく生成できるため、(34)は自然になる。

なお、注意すべきは、上で述べたことは、必ずしも「この時計」がたとえばパリに物理的に存在し（販売され）ていなければならないということを意味しない。たとえば、パリ市内の店で、カタログの中に「この時計」の写真が載っていたのであってもよいし、「この時計」がすでに名の知れた名品であってそれを電話で注文することができるのであってもよい。

次に、焦点のもう一つの特性(33b)を見てみよう。代替集合の要素になることができるのは、焦点となる語句と代替される可能性のあるものである。先の文(19)において、

(19) A : 誰が、来なかったのか。

B : [太郎]_{focus} が、来なかった。

焦点の代替集合の例をAlt={太郎, 上田, 花子, ……}としたが、この集合の要素は何でもよいわけではない。Altの要素となることができるのは、来なかった可能性が十分にあった個体である。したがって、来たかどうかまったく予測できない場合、代替集合を形成することはできず（あるいは生成できたとしても空な集合でしかなく）、(19)のBはAの質問に対して「分からない」と答えるしかない。

代替集合を形成するにあたっては、代替要素は状況の中で考えうる、あるいは予測可能であるものでなければならない（「予測」できることが重要であるという指摘は小林（1993）にも見られる）。この点に関しては、久野も論文の中で（明示的にではないが）触れている。久野の(35)の「終戦の年に生まれる」はまさにこの予測を必要とする類の例である。

(35) 私は終戦の年に生まれなかった。

「終戦の時に生まれた」かどうかは明らかに予測不可能であるのでAltが形成できず、文は不自然になる。しかし、他方、たとえば、産院から子供が元旦に生まれると聞かされていたのに子供は大みそかに生まれた場合、次のような文は自然である。

(36) A : 君の娘は何日に生まれたのか。元旦に生まれたのか。

B : いや、娘は元旦に（は）生まれなかった。

(36B)が自然であるのは、(36)のAとBがいずれもこどもが元旦に生まれそうだということを産院から聞いており、子供の出産日が予測可能である場合である。

同じような例であるが、もう一例見てみよう。Aが財布を落としたので、BはAのために財布を捜し始めたとする。財布を落としそうな場所を調べていたところ、Bは財布を見つけ、それをAに手渡したとする。この状況の場合、(37)の質疑応答は自然である。

(37) A : (この) 財布を見つけてくれてありがとう。松葉公園に落ちていたのですか。

B : いえ、松葉公園には落ちていませんでした。

(37)が自然であるのは、探す場所としてAとBの間で「松葉公園」が一つの候補であることが

了解済みである場合である。すなわち、予測可能であったことが必要となる。

他方、同じ文であっても、文の自然さが落ちる場合もある。たとえば、次の(38)において、Aは警察官で、BはAに財布の落とし物を届けたのだとしよう。この状況の場合、次の(38)の質疑応答は不自然である。

(38) A : この財布は誰のだろう。松葉公園に落ちていたのですか。

B : ?? いえ、松葉公園には落ちていませんでした。

(38) では、警察と拾い主が、事前に松葉公園にこの財布が落ちている可能性を互いに承知していたわけではない。したがって、このような状況の場合、代替集合AltP: {この財布が松葉公園に落ちている, この財布が松葉公園に落ちていない, この財布がウツボ公園に落ちている, この財布がウツボ公園に落ちていない, ……}を作ることができない。したがって、(38B)は不自然な文となる。

ちなみに、久野がマルチプル・チョイス式の文とした先の文(7)の自然さは、「このX」のような状況から固定化される語句を含まず、かつ、車で来ることが予測可能な事態であることから、容易にその容認可能性の高さが説明できる文であることになる。

(7) 今日は[車で]_{Focus}[来]_{Neg}なかったので、歩いて帰らなければならない。

以上、久野が規定した穴埋め式とマルチプル・チョイス式の区別は、代替集合の性質、すなわち、代替以外の部分は固定されるという性質から導かれることを示した。もし本論の観察が正しいならば、わざわざ二つのインフォメーション構造を想定する必要はないことになり、なお、久野はマルチプル・チョイス式の文について「反復する出来事」と特徴づけているが、この特徴づけも正確さを欠いていることになる。

ところで、久野はマルチプル・チョイス式の構造と穴埋め式の構造の区別だけでなく、それに否定のスコープを関連づけている。穴埋め式の構造の文に限って言えば、スコープが極めて狭いとする久野の説明は否定文の現象を説明することができる。そこで、以下では、否定のスコープは久野が主張するように非常に狭いものであるのかどうかを考察する。

4.2. 否定の意味計算の法則

久野のスコープ仮説では、「否定辞「ナイ」の否定のスコープは、それが附加されている動詞、形容詞、「名詞 / 形容詞+ダ」に限られる」とされ、スコープは極めて狭い。実際は、日本語には命題否定も存在するためこの仮説は正しくないことは予測できるのであるが、それでもこの仮説は少なくとも日本語の否定の重要な特徴を捉えている。その特徴とは、少なくとも日本語に関する限り、否定のスコープは狭く取られる傾向が強いということである。その理由は、否定のスコープは、狭い場合の方が意味計算が容易であることが多いからである。ただし、このことは、否定のスコープが広い場合は常に意味計算が難しくなるということの意味しない。重要なのは、否定のスコープがどの範囲に及んでいるのかは、否定文がどのような文脈のもとで使われているのかに依存するという点である。否定のスコープの範囲は文脈から切り離された文のみから判断することはできない。

4.3. 文脈と否定のスコープ

否定が狭いスコープを取る場合、否定の意味計算はスコープが広い場合よりも簡単であることを量子子を含む文で見てみよう。

(39) 学生が二人来なかった。

日本語における裸名詞が意味論的に何を指すのかは重要な問題であるが、ここではその議論は行わず、単に（英語の普通名詞のように）集合を指すものとする。さて、(39)は、論理的には、量子子「二人」のスコープが否定のそれより広い読みと狭い読みの2通りをもつ。このうちもっとも出やすい読みは、否定のスコープが量子子よりも狭い読み（ $2 \neg$ ）、すなわち、来なかった学生は2であるというものである。否定のスコープが量子子より広い、つまり $\neg 2$ である場合、(39)は「来た学生は、ゼロか、1か、3以上である」という読みをもつが、この読みは通常は出にくい（これは $\neg 2$ の読みが不可能であるということではない。肯定命題が状況により予め与えられている場合は $\neg 2$ の読みが容易に出る場合もある。本論では肯定命題が状況により予め与えられている場合を「命題否定の誘いこみ」と呼ぶ）。否定のスコープが量子子のスコープより狭い読みの方が出やすい背景には、「否定の意味計算をできる限り簡単にする」という原則があるものと考えられる。量子子の2と否定が組み合わせられる場合、 $\neg 2$ の読みは、先に挙げたように「来た学生は、ゼロか、1か、3以上である」となり、 $2 \neg$ の読みに比べてかなり複雑である。量子子の「ほとんど」になると、 \neg MOSTの読みを得るのは論理学の訓練を受けていなければ通常は非常に難しい（たとえば学生100人に関して「ほとんどの学生が来なかった」という文が \neg MOSTで解釈される場合、40人の学生が来た状況でこの文は真か偽かを問うと、答えられない人は多い）。

ところで、否定と量子子Qの関係においては注意すべき点がある。というのも、一見すると、 $\neg Q$ とも $Q \neg$ とも取れないような例が存在するからである。次の文を見てみよう。

(40) A：学生が二人ここに来ましたか。

B1：いいえ。

B2：いえ、来ませんでした。

注意すべき点は、(40)のB1とB2は、 $\neg 2$ の読み（＝来た学生は2ではない）も、 $2 \neg$ の読み（＝来なかった学生は2である）も持たないということである。むしろ、(40)のB1とB2は、来た学生がいないことを表す。この理由は次のように述べることができる。(40)のB1とB2は(40A)の返答であるので、(40A)の情報を動的に引き継ぐ。具体的には、(40A)は学生二人についての言明であるため、この情報が(40B1, 2)へ引き継がれる。つまり、学生二人を{a, b}とすると、B1とB2は、「aが来なかった、かつ、bが来なかった」、つまり来た学生はゼロであることを意味することになる。ちなみに、この動的情報の流れは、(41)で起こっていることと同じである。

(41) Two students came in. They were crying.

以上のことから、(40B1)も(40B2)も否定のスコープは狭く、その範囲は動詞「来る」であると考えてよい。なお、次の(42)の場合のように、「一人しか」のような否定と呼応する表現が

含まれる場合は、当然のことながら、否定のスコープは「一人しか」まで伸び、かつ、「学生」の情報が次の文に動的に引き継がれることはない。

(42) A : 学生が二人ここに来ましたか。

B : いえ、一人しか来ませんでした。

(43) B : (学生は / *その学生 {a, b} は) 一人しか来ませんでした。

次に、「のだ」文の場合、久野が指摘するように、疑問のスコープは「Xのだ」のXにまで及ぶ。たとえば、(44A) では、疑問のスコープは数量子の「二人」にまで及んでいる。

(44) A : 学生が二人ここに来たのですか。

B1: いいえ。

B2: ??いえ、来ませんでした。

問題は、(44A) に対する返答である (44B1) である。(44B1) の場合、来た学生がゼロであったということを表してはいない。むしろ、来た学生の数_が2であることの打ち消しを表す。すなわち、否定のスコープは量子のそれより広い。(44A) の返答として否定のスコープが広い読みが期待されることは、(44B2) が (44A) への返答としてあまり適切でないことから分かる。

以上、量子と否定辞が組み合わされる場合、否定のスコープを量子より狭く解釈することが多いことを見てきた。否定文は、しかしながら、状況次第で否定のスコープが量子より広く解釈される場合もある。以下で「命題否定の誘いこみ」と呼ぶ状況下では、命題否定の解釈は容易である。

量子では、背後にある状況や前提を意味計算の中に入れる必要性が出てくることが多い。たとえば、次の (45) において、空には何もいないとする。このとき、空を見上げた人がいきなり次のように言った場合、通常は聞き手は戸惑う。

(45) カモメが、二羽、飛んでいない。

この状況、つまり、空にカモメが見当たらない状況においては、(45) は真である。(45) は統語的にも問題がない。それでも、いきなり (45) を聞くと聞き手は戸惑う。これは、何も飛んでいない空に対して、(45) で何が否定されているかが分からないからである。このことは、逆の見方をすれば、あらかじめ何らかの状況を与えられていれば、聞き手は問題なく否定文の意味を理解することを意味する。(45) の場合で言えば、「カモメが二羽飛ぶ」という肯定命題が状況から予め与えられている場合、この命題そのものを否定することは難しいことではない。むしろ、非常に容易である。肯定命題が状況下で予め与えられている場合を以下では「命題否定の誘いこみ」と呼ぶことにする。例として、夕暮れ時にはいつも二羽のカモメが仲良く港の上を飛んでいる状況を考えてみよう。話し手が夕暮れ時に港の上空を見上げると何も飛んでいない。その場合、(45) は自然であるし、聞き手も状況を知っていれば直ちに文の意味を理解する。次の例も同様の例である。

(46) 鶏が、二個、卵を産まなかった。

(47) 路上に、ゴミが三つ、落ちていない。

(46) および (47) は、文脈や前提が与えられていない場合、意味が取れないと感ずることが多い。

しかしながら、(46)では、「あの鶏は毎朝卵を二個生むが、今朝は一個しか生んでいなかった」のような情報が予め与えられていれば、意味が取りやすくなる(今仁(1993))。また、(47)では、たとえば、映画のロケでゴミが三つ落ちているシーンを撮るはずだったのに路上に何も落ちていないのを見て監督が助手に「路上にゴミが三つ落ちていないぞ。早くしろ」と命令する場合は自然である。

以上、日本語の否定文は否定のスコープが狭い場合が多いこと、および、命題否定の誘いこみがあれば否定のスコープを広く取ること(いわゆる命題否定)は可能であることを見てきた。ただ、否定のスコープが本来狭いのであるとすると、問題となりうるのは存在量化である。(35)は、述語論理では、通常(36)の論理式に対応づけられる。

(35) 太郎は、車を持っていない

(36) $\neg \exists x (\text{car}(x) \wedge \text{have}(\text{Taro}, x))$

つまり、述語論理上は、(35)の否定のスコープは量子子よりも広い。この点をどう考えればよいのかは紙面の都合上別の機会に論じることしたい(一つの考え方としては、「太郎によって持たれる」を集合(Aとする)をdenoteするとして、その補集合($\sim A$)を考え、この $\sim A$ の中に束としての(つまり個体である)「車」が含まれていれば文は真であると定義すればよい。日本語における普通名詞を束論で記述する考え方についてはNakanishi(2007)を参照されたい)。

5. 命題否定の誘いこみ

久野は、否定のスコープだけでなく、疑問助詞のスコープについても仮説を立てている。(37)がその仮説である。

(37) 否定辞と疑問助詞のスコープ：

- (i) 日本語の否定辞「ナイ」と疑問助詞「カ」のスコープは極めて狭く、通常、その直前の動詞、形容詞、「Xダ/デス」に限られる。このスコープ制限の例外は、「マルチプル・チョイス式」焦点と、疑問詞である。
- (ii) 主題は、否定辞と疑問助詞のスコープの外にある。(p140)

久野は(37i)の例として次を挙げている。容認可能性の判断は久野によるものである。

(38) a. *君ハ、コノ時計ヲパリデ買ッタカ。

b. ○/?君ハ、コノ時計ヲパリデ買ッタカ、ロンドンデ買ッタカ。

「○/?」は、久野によれば、「まだ完全に適格文でない、と判断する人がいるかも知れない(p139)」という判断を表す。(38a)は穴埋め式焦点の疑問文、(38b)はマルチプル・チョイス式疑問文に対応する。

さて、(38a)のタイプの文は、実際は自然な文として解釈できる場合がある。例を見てみよう。Bが目の不調を感じて眼科医に見てもらっているとしよう。眼科医Aが診察すると、コンタクトが原因で患者Bの右目に炎症が起きている。眼科医Aは患者Bが、衛生管理が悪いことで有名なコンタクトファームで購入したのではと疑う。このような場合、(35)は自然である。

(35) A：眼球の表面が傷ついていますね。ひょっとしてこのコンタクトレンズ，コンタクトファームで買いましたか。

(35) は自然であるので，久野にしたがえば，マルチプル・チョイス式の文であることになる。つまり，次のような言い換えが可能であるはずである。

(36) A：眼球の表面が傷ついていますね。ひょっとしてこのコンタクトレンズ，コンタクトファームで買いましたか。それとも，コンタクトプラザで買いましたか。

しかしながら，(36) は (35) が意図している意味内容を伝達できていない。眼科医Aは，Bのコンタクトレンズがコンタクトファームで購入されたものと推測し，それが真であるかどうかを尋ねているのであって，決して多数あるコンタクト店舗から一つを候補として挙げているのではない。本論で主張したいのは，(35) のような疑問文は，マルチプル・チョイス式の文ではなく，むしろ「命題否定の誘いこみ」を行う文であるということである。

上と同じ類の文をもう一度見てみよう。時計店のAのもとに，故障したロレックスの時計が持ち込まれる。時計を見ると，いまパリで横行している偽物のロレックスに類似していたため，Aは，時計の持ち主であるBがその時計をパリで買ったのではと疑う。この状況の場合，(37) は自然である。

(37) A：ひょっとして，この時計，パリで買いましたか？

このような状況では，Aは，「この時計」をどこで買ったのかとBに尋ねているのではなく，むしろ，「この時計」をパリで買ったのかどうかを聞いている。こういった状況は，前節で論じた「命題否定の誘いこみ」を示すものである。つまり，(36) では眼科医Aは「Bがコンタクトレンズをコンタクトファームで買う」という命題を，そして，(37) では時計店の店員Aは「Bが持ち込まれた時計をパリで買う」という命題を念頭においており，これが命題否定の返答を促す。(36) を例に取ると，Aの質問に対し，適切な返答は (38B1) であって (38B2) ではない。

(38) A：眼球の表面が傷ついていますね。ひょっとしてこのコンタクトレンズ，コンタクトファームで買いましたか。

B1：いえ，そこで買ったものではありません。

B2：*いえ，買いませんでした。

他方，命題否定の誘いこみがない場合，返答は命題否定だと不自然になる。たとえば，Bは京都に行くことを嫌がっていたが，仕事上行かなければならなかったとする。この状況でAがBに (39A) のように尋ねた場合，命題否定の (39B) は不自然である。

(39) A：昨日，ちゃんと京都に行きましたか。

B1：?? いえ，京都に行ったものではありません。

B2：*いえ，行ったものではありません。

B3：いえ，行きませんでした。

この状況では，命題全体を否定する (29B2) は不自然で，「行く」を否定する (39B3) の方が自然である。「行く」そのものが否定されていることは，同じ状況における次の対話が自然であることから分かる。

- (40) A : で、昨日、行ったのか。
B : いや、行かなかった。

6. 結語

本論では、久野(1983)で主張されている否定のスコープにおける仮説に対して検証を行った。久野は、否定のスコープを極めて狭いものと見なす一方で、スコープが否定の焦点にまで及ぶ例外も認め、それぞれを穴埋め式インフォメーション構造をもつ文およびマルチプル・チョイス式インフォメーション構造をもつ文として区別する。これに対し、本論では、(i) 穴埋め式インフォメーション構造をもつ文およびマルチプル・チョイス式インフォメーション構造をもつ文の区別は、焦点と代替集合の関係から導出可能であること、また、(ii) 否定のスコープは久野が主張するように極めて狭く取られることが多いが、「命題否定の誘い込み」と本論で呼ぶ状況がある場合は否定のスコープが広い解釈が取られることを論じた。否定の意味解釈は、基本的には、「否定の意味計算が複雑化することを避ける」という原則に従っていると考えられる。本論で扱った否定は、発話の現場からは切り離されているものであった(「この時計」のような指示詞は扱ったが)。今後の課題としては、「否定の意味計算が複雑化するのを避ける」という原則が、どのように現場からの情報を処理するかを調べる予定である。

付記

この論文を書くにあたって、宝島格氏、金沢誠氏、Christopher Tancredi氏から貴重なコメントをいただいた。ここに記して感謝したい。

参考文献

- Horn, Laurence. (1989) *A Natural History of Negation*. Chicago: University of Chicago Press.
- 今仁生美 (1993) 「否定量化文を前件にもつ条件文について」『日本語の条件表現』益岡隆志編 pp. 203-221. くろしお出版
- 片岡喜代子 (2006) 『日本語否定文の構造：かき混ぜ構文と否定呼応表現』くろしお出版
- Kato, Yasuhiko. (1986) *Negative Sentences in Japanese*, Sophia Linguistica XIX, Sophia University.
- 加藤泰彦 (2003) 「否定のスコープと量化」『朝倉日本語講座5 (文法-I) 北原保雄 (編) 朝倉書店
- 工藤真由美 (2000) 「否定の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子著『時・否定と取り立て』pp. 95-150. 岩波書店
- 久野暁 (1983) 『新日本文法研究』大修館書店
- 小林ミナ (1993) 「疑問文と質問に関する語用論的考察」『言語研究』164. pp. 128-156. 日本言語学会
- 鄭夏俊 (1995) 「日本語の否定辞「ない」の意味と用法」『国語学研究と資料』19. pp. 1-15. 国語学研究と資料の会 早稲田大学
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版。

日本語における否定と焦点の関係について

- 益岡隆志 (2004) 「日本語の2つの否定型の意味」『言語研究の接点—理論と記述—』 pp. 273-282. 英宝社
- Nakanishi, Kimiko. (2007) “Measurement in the nominal and verbal domains” *Linguistics and Philosophy* 30. pp. 235-276.
- Takubo, Y. (1985). On the Scope of Negation and Question in Japanese. *Papers in Japanese Linguistics*, 10: pp. 87-115.
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』 6-5: pp. 37-48. 明治書院
- Yatabe, Shūichi. (1996) Negation and focusing in the grammar of Japanese. In Takao Gunji (ed.) *Studies on the Universality of Constraint-Based Phrase Structure Grammars* : pp. 217-225.